

## 司馬穰苴か事：文苑

著者	不老庵主人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 7
ページ	5 6 - 5 9
発行年	1895-06-07
その他の言語のタイトル	司馬穰苴か事：文苑
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4587">http://hdl.handle.net/2298/4587</a>

文苑

司馬穰苴か事

不老庵主人

司馬穰苴は、田完の後胤なり、齊の景公治世のとき、晉國兵を出して阿甄を伐ら、燕國河上を侵して、齊軍大に敗れしかば、景公心を苦しめたまふ事、一方ならず、此時宰相の晏嬰といふ人、田穰苴を公に薦めていひけるは、こゝに穰苴といふものゝ候、これは田家のすゑにて、身分こそ賤しく候へ、仁以て人を懷け、武を以て敵を挫く勇士にて候、これを試み給ひて然るべしといひければ、景公御召ありて、軍略を問ひ給ふに、應對流るゝかこどくありしかば、御威斜ならず、やかて將軍に任し給ふ、穰苴兵をゐて、打向ふ時に穰苴申しけるは、拙者數ならぬ身をもて、君の殊遇に預り、閭伍の中より擧られて、大夫の上に座すること、ねふけなくも冥加の至にこそ候へども、士卒いまた懷き中さず、百姓もいまだ信し申さず候は、偏に微賤の身にて權威のなき故に候へば、願くは君の寵臣にて國中にて尊まるゝ人一人御選遊はれ候ひて、監軍となし賜はれ候は、畢竟御方の御爲ともなり申すへしと覺え候と申しければ、景公げにもと御意ありて、莊賈といふものを遣さる、穰苴退出の後、莊賈にあひて、明日の午刻までに時を違へず、本陣まで着到せられ候へと約しけり、明くれば、穰苴馬を馳せて、先陣に着き、日表を立て漏計を懸け、莊賈の來るをまちけるに、賈君の覺めてたき

より、心驕りてければ、大將既に陣に行けり、殊にわれは監軍なれば、急くにも及ばじとて、親戚の者ども、送別の盃くみかはして留りけるほどに、はや日も午の刻になりしかど、莊賈來らず、穰苴今はこれまでなりとて表を外し、水を決し、走りて陣に入り、兵を廻りて隊を調へ、約束をいひわたしけるに、猶未來らず、夕刻に至りて、やう／＼莊賈の來りしかば、穰苴、や、貴殿は何とてかくは期を違へられ候ぞやと問ひなじりしかば、賈、色代していひけるは、拙者、上は大夫より、下は親戚に至るまで、今日拙者を見送らんとて來り候によりて、圖らず留り候ひぬといふ、穰苴聞もあへず、息まきていはく、怪しかることをきくものかな、その罪赦すへからず、元來大將たるもの、君命をうくるときは、其家を忘れ、軍に臨みて約束するときは、親戚をわすれ、金鼓の中には一身を忘るといはずや、貴殿は、今の時を、何と心おられ候ぞ、敵國深く入りて、國內騒動し、侍も大將も、境外に身をさらし、かしこくも、我君には、夜はいもねたまはず、晝は食もぬきこしめさす、百姓の命は、ひとへに貴殿の一身にかゝり候はずや、さかるに親戚に送られ候とは、抑何事ぞや、この罪赦すへからずといひて、軍正をよび出し、期に後れて來るものは、軍法には何とあるぞと問ひければ、軍正、そは斬罪に處すへきものに候といひしゝは、莊賈聞て、始めて恐を抱き、急使を馳せて、景公の赦を請ふ、其使未だ還らぬうちに、莊賈を斬罪に處せしかば、三軍皆身ふるひして恐れすといふことなし、さて時をへて、景公の使馳せ來りて陣中に入り、賈を赦せとの命を傳ふ、穰苴之を見て、大將陣中にあるときは、君の令といふども、受けざることあり、と言畢

つてさて又軍正に問ひけるは、陣中に馬を馳せぬが定なるへきに、今使者の馬を馳せたる、その罰いかに處すべき、軍正答ふ、これも斬罪に行ふへき定にこそ候へといふ、使者大に恐れて、どかくの言もなくゐけるに、暫ありて穰苴いはく、君の使を殺さんこと然るべからずとて、その僕車の驂乗を斬り殺し、三軍に狗へてさていはく、汝行きて事の由を中せとて、使を追還しけり、さて後、穰苴その宿營、井竈、飲食のことまで一々見めぐりて、病者を慰め、醫藥を與へ、みつからしてそのものをなてさすりなとして、ひたすら士卒をいたはる、その糧食は、悉く士卒に與へて、これをもてなし、常の糧食は、士卒と平分して、その身の取る所はその兵の最も弱きものにひとしくするなど、心を盡さざる所なし、三日はかりかくして、後兵を調へしに、病めるものさへ行ふんことを求めて、一軍悉く奮ひ立ちて、互に後れじとぞ争ひける、此事遠近に聞えければ、晋の勢は、風をきゝて兵を引かへし、燕の勢も水を渡りて退き去る、よりて追撃して先にどられし領地は、悉くとりかへしてぞ歸りける、未だ國都にいたらざるうちに、隊をはなち、約をとき、兵どもと誓を立て、後、邑にぞ入りける、景公諸大夫と共に郊外に出迎はれ、軍を勞らひ、禮をなし、始めて宮殿に入らせ玉ひ、穰苴に對面ありて、即日大司馬の官に任し給ひしは、これより田家益齊國に尊まれけるとぞ

原文の妙處は莊賈を斬りし一段にあり此文も尤こゝに力を用ひしとみえて字々紙上にたち千載の下その聲色をみさくかことし通篇譯文の痕みえさる

いとよし

稼 堂 植 批

日本魂

稼 堂

師木嶋の大和心ははるの花秋の霜にそあるへかりける

野寺藤花

撞きいつる野寺の鐘にゆらかな風なき庭の藤波の花

硯友會の席にて

窓あけて打なかむれは淺緑にこそいはれね卯の花の頃

阿彌陀寺にて躑躅花を

綾にしき錦にあやの岩つゝしはなのうてなや御佛の國

高田氏の芍薬を見にゆきて

いよす垣内外うちとに匂ふ芍薬のはなに心のへたてなのよさ

客居夏日

青柳の長さ日あかす文これに旅の浮寝の言のはもなし

栗屋君のこまかりたるをいたして

不老庵主人

ことしのこ墨染にさけ白雲の立田のはなよ心ありせば

世の風雲（硯友會席題）